https://www.udojingu.or.jp

鵜戸

UDO JINGU

vol. 100
紀元 2685年
令和7年 7.1

奉祝 昭和一〇〇年

社報一〇〇号刊行によせて

column

コラム 海幸山幸 11

戦時下の鵜戸神宮

去る四月七日、天皇皇后両陛下におかせられましては、玉砕の島・硫黄島にて慰霊の祈りを捧げられました。今後は沖縄（六月四日）・原爆投下地の広島（六月十九日）・長崎にも行幸啓遊ばされる予定ださうです。

顧みれば、大東亜戦争が開戦したのは昭和十六年十二月八日のことでした。

鵜戸神宮では同年十二月十九日に、天皇陛下のご名代（勅使）として長船克己宮崎県知事をお迎へし、「宣戦奉告祭」を斎行してゐます。「日向日日新聞」（昭和十六年十二月十九日付）は、潔斎の後に衣冠装束に威儀を正した長船知事が、「神前に拝礼朗々と御祭文を奏じ、親しく宣戦のことを御報告、聖戦完遂に神明の加護を深く祈念し奉る」と報じてゐます。なほ、開戦時の鵜戸神宮宮司は伊東畯次郎でしたが、同十七年三月より永友宗清（同二十三年三月迄）が務めてゐます。

しかしながら戦局は日を追ふごとに悪化していきました。

参拝者も殆どなく、祭典用の神饌すらも事欠く状況となつてゐました、そこで、この窮状を見かねた氏子たちが行動にでました。配給された貴重な食料を持ちより、「行事祭典の遂行維持に努め守護し奉った」（『郷土鵜戸の史的歩み』といふのです。また同二十年三月の日南市の空襲の折には、境内にまで飛行機の銃撃が及んだとのことです。ご本殿が鎮座してゐる洞窟上が爆撃でもされたことなら大惨事でした。この事を危惧したのが、飫肥警察署長であつた杉山機知郎です。

杉山署長は、「鵜戸神宮は官幣大社でしたので、その御神体の護持に大変神経を使いました。いざという時には、北郷の郷之原神社に御神体を移すという計画をしていた」とのことです（『日南市史』）。

幸ひ御神体の遷御はせずに終戦を迎へることができましたが、戦時下といふ国家存亡の機にあたり、日々の祭典に不備をきたさぬやう神饌を持ち寄つた氏子や、ご神体護持に心を砕いた警察署長らの敬神の念は、銘記されねばなりません。

時恰も今年は大東亜戦争終結より八十年の節目の年です。心ならずも戦禍に斃れられた多くのご英霊などに対し感謝の誠を捧げたいと思ひます。

（宮司・黒岩昭彦）

発行者兼編集者
鵜戸神宮社務所
〒887-0101 宮崎県日南市大字宮浦3232番地
TEL 0987-29-1001 FAX 0987-29-1003
鵜戸神宮
https://www.udojingu.or.jp

社報一〇〇号刊行によせて

鵜戸神宮宮司　黒岩　昭彦

今号は、鵜戸神宮にとりまして記念すべき社報「鵜戸」一〇〇号です。

創刊は五十六年前の昭和四十四年四月一日付で、時の宮司は長友安美です。「御神威を畏みて」にて、「昭和御改修を記念して社報「鵜戸」を発刊することと致しました」と書いてゐます。昭和三十七年に発足した「鵜戸神宮造営奉賛会」における大改修事業をおこなつてをり、昭和四十三年七月十三日には、本殿改修の「正遷座奉祝祭」を斎行してゐます。つまり、ご内帑金を始め造営奉賛会寄附金を以て造営したことを契機に、「此の社報を通じて崇敬者の皆様方に鵜戸山の社務の近況をお知らせする」ことが目的といふのです。

◆　◆　◆

社報を刊行する目的は三つあると思ひます。

一つは社報を通じ神社の神事や行事を知らせることで、氏子や崇敬者の方々への教化活動にあたる役割です。もう一つは、神社の活動等の記録保存です。そして三つ目が、認知度向上の広報といふ目的です。しかしながら、SNSなど瞬時に情報を発信できる広報媒体が昨今は発達し、神社側から発信せずとも個人単位での情報が溢れかへつてゐます。ましてや、年二回の刊行となれば、なほさら情報遅れとなります。

この三つの社報刊行の目的のなかで、小職が最も大切にしてゐるのは、二の「活動等の記録保存」です。毎回随筆を執筆してゐますが、その手助けとなつてくれるのが過去の社報だからです。

◆　◆　◆

一　例を挙げれば、「鵜戸」三十一号（平成三年一月一日付）と三十二号（同年七月一日付）に掲載された、「「一本杉」折れる」と「一本杉の根元幹・枝保存」といふ写真入り記事です。宮司就任して間もない頃、社務所から儀式殿への渡り廊下の奥まつた処に、老杉の枝が飾られてゐることに気付き、不思議に思つてゐました。ところがこの記事に出くはしたことで、この老杉の枝が、平成二年九月十八日から十九日午前にかけ襲来した台風十九号の被害によるものであることを知つたのです。更に三十六号には、氏子の平下与平氏が一本杉の枝を「挿木」に育て、平成五年一月に、そのうちの八本を倒木した参道脇に植樹したといふのです。この三つの記事に触発され書いた随筆が、九十五号「「一本杉」の命脈」（令和五年一月一日付）です。

また、行事を催すきつかけとなつた例としては、七十九号（平成二十七年一月一日付）に掲載された本部雅裕前宮司の挨拶記事があります。延岡市で開催された「第十八回天下一薪能」にて上演された「鵜羽」を紹介したもので、これにより、世阿弥作の「鵜羽」といふ鵜戸神宮所縁のお能の存在を知つたのです。令和六年五月四日に、観世流の大槻文藏師の協力の下に上演できた背景には、この社報記事があつたのです。

◆　◆　◆

「海上御神幸祭」画：渕田賢二（鵜戸神宮権禰宜）

他にも、二号に掲載された宮田久真造氏の「鵜戸神宮御神幸をお迎へして」の記事より、かつて、「海上御神幸祭」といふ鵜戸港から油津港までの海上を数十隻の漁船を連ね渡御する、勇壮な夏祭りが斎行されてゐたことを知るのです。また、四号には「初詣で賑う―初のおちちあめ湯接待」といふ記事があります。祈願を受けた方や正月期間に休憩所にて出してゐる「アメ湯」は、昭和四十五年元旦から始められたのです。そして二十四号の「第一回シャンシャン馬道中唄全国大会を開催」の記事から、大会開始の経緯が窺へます。

かく見てゆけば、社報刊行の目的は明確となり、後進にのこすべき記事も見えてきます。

令和以降であれば、何といつてもコロナ禍の記録でせうし、令和五年に実施した「うさぎ年奉祝事業」（鵜戸神宮の神使はウサギとされる）などが挙げられるでせう。また最近では、大型クルーズ船の油津寄港の際の外国人参拝の急増など記録すべき事柄だと思ひます。

◆　◆　◆

二　千年の歴史を紡いできた鵜戸神宮にはのこしてゆくべき信仰の記録が山のやうにありましたが、昭和四十五年七月の社務所火災により焼失し、その全容が今となつては判らず仕舞ひとなつてしまひました。それ故に、過去の記録の一端を書き記した社報「鵜戸」は、僅か年二回の執筆とはいへ、大変に貴重であつて、記録しておかねば忘れ去られ埋もれてしまふ出来事を留める役割を担つてゐます。社報や日々の神社日誌をのこしてゆくことが、百年二百年後の後進への財産ともなるのです。

次の一五〇号、二〇〇号を目指し、ささやかながらも社報の充実に向け努力することをお誓ひ申し上げ、結びと致します。

社報「鵜戸」一〇〇号回顧

鵜戸神宮の社報「鵜戸」が、今号を以て一〇〇号の節目を迎へることとなりました。その歩みを歴代宮司ごとに振り返つてみませう。

長友宮司時代 ― 創刊号（昭和44年）～ 19号（同57年）― 全19号

記念すべき創刊号は、長友安美宮司時代の昭和四十四年四月一日付です。四頁で、唯一のB四刷りです。同年の二号からは現在と同じB五判へと変更してゐます。

五年間のブランクが生じ、復刊号と記された五号刊行（同五十年七月一日付）となつてゐます。「昭和四十五年七月十日夜半に発生した社務所火災」のためと、詳しくその経緯を書きのこしてゐます。日々の神明奉仕に加へ、新社務所の建設、儀式殿、御神門の造営など多忙となつて、社報刊行の余裕もなくなつたのです。

因みに、同五十年に復刊した理由は、昭和天皇御即位五十年の節目の年であり、同四十八年四月十一日には、天皇皇后両陛下のご親拝を賜つてゐることから、その報告が必要となつたためです。二年遅れの記事ですが、御即位五十年奉祝の機運を醸成すべく、両陛下が儀式殿に向かはれてゐる写真を表紙に掲載してゐます。また同五十四年九月十六日には、皇太子同妃両殿下（現・上皇上皇后両陛下）のご親拝も賜りました（十四号）。

この時代の社報で印象深い記事は、かつて当神宮にて「海上御神幸祭」を斎行してゐたことです。「金銀珠玉の鵜の鳥を艤装した御座船油津漁業協同組合所属の振興丸を始め、満艦飾を施した漁船、百余隻が供奉し鵜戸港より油津港までの十八浬の海上を渡御」（二号）したと記してゐます。また十二号には、十回目の御神幸祭の特集記事がありますが、台風襲来により予定の海路による渡御は叶はず、油津港まで陸路での御神幸になつたと報じてゐます。なほ、同五十五年を最後にこの御神幸祭は斎行されてゐません。

長友宮司時代は、高度経済成長期にあたり、旧社務所の火災はありましたが、その復興を見事に果たした時代でもあります。新婚旅行ブームの到来で社頭が賑はいを見せてゐたことがわかります。

佐師宮司時代 ― 20号（昭和60年）～ 45号（平成10年）― 全26号

昭和六十年一月一日付の二十号は、佐師朝規宮司が就任して初の社報で、三年ぶりの刊行となりました。昭和天皇御即位六十年の節目の年です。この時代は昭和天皇崩御から新帝ご即位、さらには皇太子殿下と雅子さま（現・天皇皇后両陛下）の御成婚が整ふなど、年号も替はり皇室関係記事が目立つのは当然です。

二十四号の「第一回シャンシャン馬道中唄全国大会を開催」といふ記事がありました。今年で第三十九回を迎へたこの大会は、佐師宮司時代に始められたのです。その開催記事（二十五号）には、茨城県はじめ三四九名の出演者とあります。また「シャンシャン馬道中の再現」も行はれ、家入忠則夫妻の写真が表紙を飾り、二十七号には、「シャンシャン馬道中唄歌碑」が建立されたといふ記事があります。

一方、第三授与所や休憩所を建設した記事を掲載してゐます。また、平成八年六月十五日の責任役員会にて御本殿改修の決議がなされ、その募財活動を行ふことを決定したのです。四十四号には、「仮殿遷座祭斎行」と「御本殿改修工事」協賛者芳名を掲載してゐます。そして平成九年十一月六日に「本殿遷座祭」、同年十一月八日には「本殿遷座奉幣祭」を斎行、四十五号はその特集記事で、十四頁中十一頁を充ててゐます。

御本殿改修といふ大工事を花道に、宮司は平成十年六月三十日に勇退しました。

杉田宮司時代 ― 46号（平成10年）～ 65号（平成20年）― 全20号

杉田秀清宮司時代には、一月一日付と七月一日付年二回の定期的刊行となりました。

平成十年六月には、千鳥橋から休憩所の山手側斜面にかけ、幅約五十メートル、高さ五十メートルが崩落するといふ大災害に見舞はれました。四十六号では「参道山側斜面崩落」と「参道復旧工事に付き御協賛のお願い」記事を掲載してゐます。同十一年二月二十六日には「災害復旧工事竣工奉告祭」を斎行してゐます。

一方、「縁日大祭斎行」、「御田植祭斎行」の記事に目が留まりました。昭和二十九年を最後に途絶えてゐた縁日大祭を復活させ、更には江戸中頃まで確認できる御神田行事を再興したの

です。以後毎年これらの記事を大きく報じてゐます。

この時代から奉納者の記事が増えていきます。宮崎県出身の画家・井山忠行の「杉戸絵奉納」は特に目立ちます。第六十三号～六十六号に亘り、井山氏から宮司宛の手紙まで掲載してゐます。また五十七号には、フランス在住画家・マークエステルの「油絵奉納」があります。神話をモチーフとした絵を全国神社に奉納された方で、当神宮では二点所蔵してゐます。更に五十八号には、韓国在住の中国人彩墨画家・趙潤勤の「彩墨画奉納」、五十一号、六十五号には小倉宗衛の能面「翁」と「父尉」奉納を掲載してゐます。

新企画としてのシリーズ「境内の植物」（五十四号から六十三号）は、興味深いです。リュウキュウアサガオ、アヤメに始まり、ツワブキ、ハマユウ、カラタネオガタマ、トベラ、サンゴシトウ、ヤツデ、橙、カイコウズ、オオタニワタリとあり、当神宮境内に自生する貴重な植物を写真入りで紹介してゐます。

杉田宮司は平成二十年二月末日を以て宮崎神宮へ転任しました。

本部宮司時代 ― 66号（平成20年）～ 88号（令和元年）― 全23号

本部雅裕宮司時代も年二回（一月・七月）定期的に刊行してゐます。

これまで見られなかつた海上自衛隊掃海隊の「航海安全祈願祭」や、落語家・柳家さん枝による「鵜戸さん寄席」の記事は毎回載せてゐます。

この時代には災害被害の記事が目立ちました。六十八号には、楼門海側の欄干脇斜面崩落の「参道復旧工事」を掲載してゐます。前宮司時代の平成十九年七月十四日の台風四号による高波と高潮被害に加へ、八月二日の台風五号により、崩落部拡大と楼門前石段の亀裂と欄干が傾くといふ大災害です。八十四号には、「海岸参道復旧」の記事があります。平成二十八年七月の大雨で市道鵜戸参宮線が土砂災害に見舞はれました。この記事は通行が一部解除になつたといふものですが、八十五号によれば、全面復旧したのは同年十一月一日といひます。このやうな大災害に度々見舞はれながらも、平成二十九年十月十三日には、文部科学大臣より鵜戸神宮一帯を国の名勝とする旨の発表がありました。八十五号は「国指定名勝鵜戸」の奉祝事業を伝へてゐます。

また、宮崎県出身の書家・寺原聖山の書や、刀匠・松葉國正の「平成の鵜の丸太刀」などが奉納され表紙を飾つてゐます。その他、「末社・九柱神社改修工事」、「手水舎移設」、「運玉授与所新設」、「授与所改築」、日本製鉄（株）奉納のチタン材による末社・住吉神社の屋根の張替へなどの改修工事の記事も見られます。

宮司は巻頭言にて、折に触れ当神宮の歴史事象を紹介するなど健筆を揮はれました。令和元年六月末日を以て宮崎神宮へ転任しました。

現・黒岩宮司 ― 89号（令和2年）～ 100号（現在）― 全12号

臨時号を除き、年二回（一月、七月）の刊行は変はりませんが、頁数を八から十二に増やし、より親しみやすく見やすい社報作成に取り組んでゐます。毎回、鵜戸神宮にまつはる随筆に、当神宮の渕田賢二権禰宜がイラストを描いてゐます。また新企画として、最終頁に「コラム欄」を設けたほか、お守りなど授与品の紹介も掲載するやうになりました。

また、災害等復興の機運を盛り上げる目的もあつて、イベントが増えたのは大きな特色です。令和四年元日の「疫病収束祈願奉納花火」の記事や、令和五年の「うさぎ年記念事業」（「寺原聖山個展「敬神」」、「松葉景正刀剣展」、米良美一「トーク&ライブショー「歌旅」」など）です。

世界規模での新型コロナウイルス蔓延、「第一駐車場陥没状況」、更には震度六弱を観測した「日向灘地震」の被害記事なども少なくありません。気候変動に伴ふ災害被害が、長友・佐師宮司時代とは明らかに異なり増えてゐることが記事からも窺へます。

一方で特筆すべ記事としては、「運玉」の値上げ変更（百円から二百円）があります。九十四号にて、運玉の歴史や「亀石」の説明など行ひ、値上げの理解を得るべく記述してゐます。

また、かつて鵜戸から伝はつた神楽を銀鏡神楽保存会の協力を得て習得してゐる「鵜戸神楽」の復活、披露といふ記事があります。当神宮所縁の復曲能「鵜羽」の作品解説や、公演開催の報告記事も掲載するなど、時代の特色や残すべき記録を取捨選択しながら、晴れて一〇〇号を迎へたのです。

社報「鵜戸」一〇〇号を祝う

宮崎神宮名誉宮司　杉田　秀清

社報「鵜戸」一〇〇号の発行心よりお慶び申し上げます。

このエッセイは、私が鵜戸神宮の宮司であった平成十四年七月文藝春秋七月臨時増刊号「二人で旅を」に掲載された文を少し手直したものです。鵜戸神宮の景観美や、シャンシャン馬道中唄や運玉などの習俗を紹介しました。旧文ではありますが、小職の鵜戸神宮への思いを綴った記事ですので、これを以て、社報「鵜戸」一〇〇号の祝辞に替えさせていただきます。

「日向の国より祈りをこめて」

宮崎平野を南下し、ビロー樹の茂る青島を過ぎると急な山坂で、登りつめると眼下に太平洋の大海原が広がる、堀切峠の絶景である。ここから日南まで三〇㎞の海岸線が続く、沿道にはフェニックス、女王椰子、蘇鉄などの樹木、ツワブキ、ハイビスカス、ブーゲンビリアなどの花々が見え、南国情緒豊かな風景が広がる。

この海岸線沿いに、私が宮司を務める鵜戸神宮はある。岩壁の海に面し荘厳な洞窟の中にある。社前の奇岩には波濤か打ち寄せては白い飛沫となり飛び散る、千古の朱塗の御社と大洞窟が相まって鵜戸神宮は屈指の景勝地である。

かつてこの地方には新婚夫婦が「シャンシャン馬」に乗って鵜戸詣りをする風習があった。昭和三十七年皇太子ご夫婦（現上皇・上皇后両陛下）がご参拝になられ、昭和四十年ＮＨＫの連続ドラマ「たまゆら」の舞台ともなり、それらを受け、日南海岸は、新婚旅行の行先として大ブームになった。昭和四十年頃には、全国の新婚夫婦の三十％、約四十万組が訪れた。宮崎はカップルで一杯で、新郎は背広にネクタイ、新婦は帽子、手袋をはめブーケを持つハネムーンスタイルがお決まりだった。

しかし昭和五十年代末から宮崎の観光にかげりが見え始め、旅行者は減少して行った。

私は社頭に立ち多くの観光客や参拝者に出会えるよう努めている。先日六十歳半ばのご夫婦が参拝にいらした。

「私たちは三十年前に新婚旅行に来て宮崎を廻り、鵜戸さんにもお詣りしました。その時の運転手さんから年賀状を毎年もらっています。まだその運転手さんのタクシーに乗ってきました。」そのお二人のそばでよく知る樺木野運転手がにこにこしている。

社殿下の磯には「亀石」があり、運玉と呼ばれる粘土の運玉を投げて、亀石の背中の凹みに入れば願いが叶えられると言われている。

「運玉を投げて、これから家族の健康と幸せを祈って帰ります。」と二人はニコニコ帰られた。

私と妻も子育てが終わり、やっと二人での旅が出来るようになった。過日、友人のいるバリ島に行った。かの地では、寺院、歌踊り、信仰、古跡、人々の日々の暮らしが渾然一体となって「観光や信仰、生活」が共存して息づいていた。異文化なのに心が安らぎ、懐かしく感じた。私も信仰と観光の共存する御社に奉仕している。

大海原に面し、絶えまなく押し寄せる波濤のエネルギーを受けて、造られる海岸の奇岩。静寂さを持つ洞窟の中に鎮座する鵜戸神宮。皆様は、この場に面した時驚嘆される。

南国は日向の地鵜戸神宮より、皆様の平安とご多幸を祈るのである。

「鵜戸」の一〇〇号をお祝ひして

宮崎神宮宮司　本部　雅裕

社報「鵜戸」の発刊一〇〇号、おめでたうございます。

私の神職としての出発点は、鵜戸神宮です。昭和四十九年四月に社内権禰宜として奉職しました。当時社報は休刊中でした。復刊されるのは昭和五十年七月の第五号からでした。その時、私は「鵜戸」の復刊と編集を命じられ、退職する昭和五十四年発行の第十三号まで、その紙面作りに携はってきました。

私は、「鵜戸」を多くの方々に見てもらひたいとの一心で、いくつかの試みをやってみました。そのひとつが「鵜戸山散歩」のコーナーを設けたことです。それは、由緒ある「鵜戸さん」の長い歴史と重層な信仰、そして広い境内を参拝の方に少しでも知っていただきたいとの思ひからでした。取り上げたのは、「亀石」や「御陵」、「磨崖仏」、「拝殿の彫刻」、「別当墓地」などでした。さういへば、日向灘を流れ着いた大亀の死骸についても研究者の意見を交へて書いたことがありました。

また当時は、今のやうにパソコンなどはなく、原稿はもちろん手書きです。印刷も活版印刷でした。宮崎市の西日本印刷（社名は大きいが個人経営の小さな工場）に原稿を持ち込んでゐました。宮田社長やご夫人に会ひ、おしゃべりをするのも楽しみのひとつでした。たまには私も、職人さんに習ひながら一字一字活字を拾ってみたりしました。また校正も大変でした。活字がひっくり返ってゐることも度々でしたから。

私はその後、平成二十年三月に鵜戸神宮宮司として赴任しますが、そのころは「鵜戸」の刊行も軌道にのってゐました。それから令和元年六月に宮司の職を辞するまでの十一年三カ月の間、第六十六号から八十七号までの巻頭言と、八十八号の「退任のご挨拶」までを書いてきました。毎号、その時のお祭りや行事、話題を取り上げることによって、宮司としての思ひを率直に述べてきたつもりです。ご覧いただいた氏子や崇敬者の方々からの反応もまた、よい刺激になりました。

どうかこれからも、「鵜戸さん信仰」を発信する唯一の紙面としてご発展されますやう、またその充実した紙面づくりに鋭意邁進されますやう祈念申し上げ、一〇〇号発刊のお祝ひの言葉といたします。

すぎた　ひできよ
杉田　秀清
昭和十二年一月二十二日生
鵜戸神宮第十代宮司
（平成十年七月一日～
同二十年二月二十九日）
現在宮崎神宮名誉宮司

ほんぶ　まさひろ
本部　雅裕
昭和二十六年五月九日生
鵜戸神宮第十一代宮司
（平成二十年三月一日～
令和元年六月三十日）
現在宮崎神宮宮司

昭和一〇〇年奉祝

シリーズ① 懐かしの鵜戸神宮 ― 昭和二十年代まで

大正十五年（一九二六）十二月二十五日、畏くも大正天皇が崩御遊ばされました。皇太子裕仁親王殿下の践祚に伴い改元が行われ、同日「昭和」が始まったのです。「昭和」の元号は、『書経』の「百姓昭明、協和万邦」（百姓昭明にして、万邦を協和す）から採ったものです。

世界は帝国主義の動乱時代でした。満州事変、支那事変などが起こり、昭和十六年には大東亜戦争が開戦しました。長く激しい戦いの末、昭和天皇は昭和二十年八月十四日にポツダム宣言受諾のご聖断を下され、八月十五日終戦の詔勅を玉音放送にて発せられました。

戦後は七年に及ぶ占領軍の統治下におかれましたが、昭和二十六年のサンフランシスコ講和条約により主権を回復しました。同三十九年に東京オリンピック、四十五年に日本万国博覧会を開催するなど、目覚ましい経済発展をとげ、そのご治世は六十年余の長きに亘ったのです。

時代は、平成、令和と移りましたが、本年は「昭和」の元号に数えれば、ちょうど一〇〇年の節目の年にあたります。そこで、鵜戸神宮の昭和時代の写真や絵葉書をシリーズで紹介し、懐かしい昭和一〇〇年を振り返ってみましょう。

玉橋

本殿に下る最後の階段の手前に玉橋（神橋）が架かっています。

戦前は、参拝者が橋の手前で裸足になり、お参りしていましたが、戦後はこの習慣も徐々になくなり、履物のまま参拝するようになりました。

昭和初期　向かって右側は、履物を入れる下駄箱

両部鳥居

現在の神門と楼門が建立される以前は、同じ場所に両部鳥居が一基ずつ建てられていました。主柱の前後に袖柱を設けたもので、神仏習合の神社に多く見られます。昭和四十七年に神門新築、同五十年に楼門が新築される際、撤去されました。

昭和10年10月20日　参拝記念の絵葉書

戦艦「日向」

宇垣纏大佐以下士官三十余名のお参りがありました。艦内神社（神棚や小祠がお祀りされていた）は宮崎神宮ということもあり、その後にお参りしています。なお宇垣中将（当時）は終戦日に特攻死しています。

昭和13年3月14日　戦艦「日向」参拝

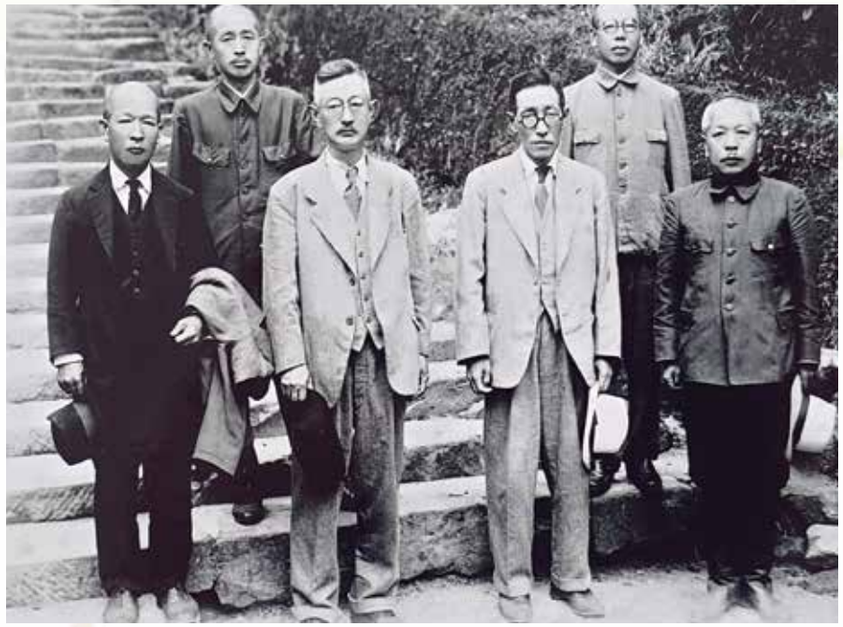
三笠宮ご参拝

三笠宮崇仁親王にお参りいただいた際の一枚。昭和天皇の弟宮で、古代オリエント史の研究者としても著名。県内ご視察にてのご来宮で、宮崎神宮・狭野神社にもお参りされています。

昭和17年9月5日　三笠宮崇仁（たかひと）親王殿下ご参拝

昭和21年6月6日

九州各県神社庁の会合が宮崎県で開催された際の一枚か？前列左から幡掛正木（筥崎宮宮司）、佐々木行忠（後の神宮大宮司）、宮川宗徳（神社本庁総長）、横山秀雄（宇佐神宮宮司）、後列左から、片岡常男（宮崎神宮宮司）、永友宗清（鵜戸神宮宮司）。



昭和21年6月6日　宮川宗徳神社本庁総長他参拝

照明設備奉納奉告祭

令和七年一月二十五日、（株）共立電照代表取締役社長・米良充朝氏参列の下、照明設備奉納奉告祭を斎行しました。工事は、令和六年十二月暮れに行われ、参道の玉橋下から本殿に通じる階段の欄干に取り付けられました。米良電機産業（株）代表取締役会長・米良充典氏の「玉橋下の階段が暗い」とのご指摘によるもので、ご子息の充朝氏が工事一切を請け負いご奉納いただきました。

兎の像奉納

《奉納奉告祭》

この度、崇敬者の方々より兎の像が奉納されました。奉告祭は、それぞれ本殿にて斎行され、宮司をはじめ奉納者参列の下、厳粛に斎行しました。

なお、斎行日・奉納者は次の通りです。

令和七年三月三日
大智（株）
代表取締役
古木 幸恵様

（株）栄輝
代表取締役
古木 一功様

令和七年六月十一日
プラスディ（株）
馬場 謙喜様
佐藤 友美様

日南市道鵜戸参宮線の片側通行と別当墓地の復旧について

昨年八月八日に発生した日向灘地震（震度6弱）後の大雨による落石により、一カ月余りに亘り日南市道鵜戸参宮線が通行止めとなりました。二次災害を防ぐための落石防護柵が設置され、九月二十七日には片側通行となりましたが、全面復旧には未だ時間がかかりそうです。平日は工事用信号機による交互通行とし、土日祝祭日には警備員を配置するなど、日南市には対応いただいております。参拝者の皆さま方にはご不便をおかけ致しますが、何卒ご理解をいただきますようお願い致します。

一方、「別当墓地」での被害も甚大でありましたが、三月末日を以て既に復旧を終えています。

インバウンド関連

海外からの参拝者増

コロナ禍で減少していた海外からの団体や個人の参拝が、増加しています。

時間帯によっては、日本人よりも海外の参拝者が多いこともあります。

日南市のクルーズ船誘致活動により、令和六年は十一隻（総乗船客 九，二五三名）でしたが、今年は十六隻（総乗客定員 二九，〇九九名）が寄港予定で、既に六隻（五月二十日現在）が寄港しています。五月十一日にはクイーン・エリザベス号が寄港し、乗船客（二，〇〇八名）の多くが参拝して、風景や運玉を投げる様子を携帯で撮影したり、SNSで発信したりしていました。この日は、クルーズ船以外の外国団体客や家族連れも見られ、本殿前はより多くの参拝者で溢れていました。

油津港に寄港したクイーン・エリザベス号
（日南市観光・クルーズ課提供）

五月十六日には、マウイ島在住のフラダンス指導者クムフラウルヴェヒ・ゲェレロ氏他トップダンサー六名とその関係者を含め四十一名が来宮しました。本殿にて宮司斎主の下、世界平和祈願祭が斎行され、御神刀の説明を受けた後、運玉投げを楽しんでいました。

令和7年5月11日

また、同月二十二日には、台湾の世界的自転車メーカー「ジャイアント」が設立した、サイクリングツアーを専門とする旅行会社「ジャイアントアドベンチャー」の鄭秋菊会長他十四名が、モニターツアーで参拝しました。

日南市が「日南刀光夜」開催

この度、外国人の誘客を目的としたイベント事業が鵜戸神宮儀式殿にて開催されました。日南市が観光庁の補助を受けて実施したもので、一月二十一日から同二十九日にかけ五十四人の参加がありました。

「刀」をテーマとしたもので、日本の伝統文化を楽しみながら、宮崎の食材を使った食事をご堪能いただきました。日本刀演武や神楽などをご覧いただいた他、刀匠として無鑑査の称号を持つ松葉景正氏作刀の鵜戸神宮所蔵の二振りも展示されました。

神楽鑑賞する参加者

お守り紹介

鍵守

「鍵を握る」とは、ある事態や状況において、重要な役割を持つこと、または影響力を持つことです。「現状打破の鍵を握る人物」などと使われます。このお守りを受けた方が、幸運の鍵となられるよう祈念してあります。

御初穂料 一〇〇〇円

仕事運向上守

〝立身出世〟〝仕事運向上〟吉兆柄をお守りに織り込んでいます。

御初穂料 一〇〇〇円

責任役員・氏子総代・崇敬者総代委嘱

責任役員、総代の改選に伴い、五月一日に氏子総代・崇敬者総代委嘱奉告祭、六月一日に責任役員委嘱奉告祭を月次祭に併せ斎行しました。その後、それぞれ儀式殿において委嘱式を執り行いました。

任期は三年間で、総代が令和十年四月三十日まで、責任役員は同年五月三十一日までです。

なお、今回委嘱された方々は、以下の通りです。

責任役員

［会長］藏富英志（再任）
清水満雄（再任）
倉岡清美（再任）
稲田繁男（再任）
松田利正（新任）
杉原　実（新任）
米良浩之（新任）
湯浅享明（新任）

氏子総代

［会長］石村　唯
鶴田三憲　川瀬　力
吉田利光　川瀬　靜
関屋　正　長友　泰
蛯田　透　育田喜一郎
源　勝彦　樋口　真一

崇敬者総代

［会長］歌津芳秋
濱中武紀　横山　正
髙橋紘久　関屋吉啓
木脇節哉　落合孝俊
岩切文宏　上村育俊
砂糖康夫　日髙　司
石灘健次　金田　強
門丸正憲　外山栄告
松田圭司　歌津眞彦
長鶴浅彦　福嶋由二

敬神婦人会

五月二十日に開催された鵜戸神宮敬神婦人会総会において、新会長に川瀬良子氏が選任されました。

会員数は五十八人で、主な活動は、ジャカランダ広場の植栽活動、国旗小旗の作製など行っています。また、毎月卯の日に斎行される縁日祭・誕生感謝奉告祭にも、多数ご参列いただいています。